

作りの
手からの
メッセージ

新たな思いで米づくり

今年の冬は例年になく降雪が少なく、日常の暮らしには大変助かりましたが、オニコウベスキー場では年末年始に雪がほとんどなく、訪れていただくお客様が減少したシーズンだったそうです。

そんな鬼首にも春がめぐってきました。残雪が少しづつ

雪解け水となって大地を潤す季節となりました。そうです「ゆきむすび」にとっても11年目の田植えの季節です。

昨年「結び合う米作り、鳴子の米プロジェクト10年感謝祭」を開催し、30アールからスタートした出発の日々や、これまでの10年を振り返り、応援いただ



後藤家自宅前からの風景。後藤家の田んぼでは、プロジェクトスタート時から交流の田植えや稲刈りが行われてきました。亡くなった後藤磨さん交流を楽しみにし、田んぼの手入れを担って来ていました。

いた多くの方々に「ありがとう」の感謝の気持ちを心から伝えさせていただきました。この10年を礎として新たな10年へ向けて今年はお出立の年です。

昨年は我が家にとっても大きな出来事がありました。以前、鳴子の米通信で紹介した我が家の農作業リーダー（鉄頭）が（くわがしら）だった父が、感謝祭を開催した翌日の15日に90歳で来世に旅立ちました。死の直前に働き続けた生涯でした。生前、父がとても楽しみにしていたことの中に、長年の鬼首にとっての願い、国道108号花洲山バイパスの開通がありました。本人も車を運転するので、開通した道路を自分が車を運転して通行するのがこの頃の夢でしたが、そのバイパスの開通式が行われた11月15日にこの世に別れを告げました。私は病院から亡き父と共に自宅に帰る時、開通したばかりのバイパスを通過して、父に「ようやく開通したよ」と話しかけながら帰ったこと、忘れることのできない一日となりました。

今年父が亡くなって初めての米づくりのスタートです。これまで頑張ってくれた父の姿を忘れることなく、しっかり田ん



鬼首の田植えは、毎年遠くの山々の残雪を眺めながら。新緑と歩調を合わせるように、少しずつ増えていく川の雪解け水。まだ冷たい水で農作業が始まります。

ぼを守らなければと思っ

東日本大震災から五年が過ぎ、そして、大崎市誕生から10周年となりました。私達の住む環境も少しづつ変化しつつありますが、今年も作り手部長として、会員みなさんと力を合わせ、いつも支えてくださる食べ手の皆さんに思いをはせ、美味しいゆきむすびが届けられるよう、

作り手部長
後藤 錦信

そして原点に立ち戻る

鳴子の米プロジェクトが動して10年を迎える。2006（平成18）年9月15日、「第1回鳴子の米プロジェクト会議」が開催され、プロジェクトがスタートした。その日のことは、10年経っても鮮明に思い出される。翌年度から国の『品目横断的経営安定対策』が始まり、一律に大規模化が図られることになった。もともと標高が高く、耕地面積が狭小な鳴子地域の農業をどう守っていくか、それぞれの危機感を抱きながら、農業生産者、ものづくり職人、加工・直販所グループの女性たち、観光事業者など総勢30名が、初めて一堂に会したのである。

これから何が始まるのか、緊張した面持ちの出発者を前に、プロジェクトのプロデューサーを務める結城登美雄氏が問いかけた。「人の命をつなぐ米づくりをこのままつづべて良いのか。再び、農家の人に米づくりへの希望を持ってもらうために、我々が作り手と食べ手をつなぐ『地域の支え手』になれないか。」と。そ

して、同時に提案されたのが、作り手の米を採算のとれる金額（1俵1万8千円）で食べ手に買い支えてもらう「仕組み」である。この仕組みの仲立ちをすることが、今でも鳴子の米プロジェクトの中核的な事業となっている。この日から、鳴子地域の農業を守るために「地域の支え手」になろうと思いを強くしたメンバーによって、プロジェクトが動き出したのである。

最初の5年間（2006～2010年）は、住民主導の取り組みとしてメディアにも取り上げられ、全国的に注目された。それまでの任意団体を、継続的な活動主体としてNPO法人にしたのも、この時期である。さらに、鳴子の農と食の拠点として、「ゆきむすび」（プロジェクトのシンボルであり、寒冷地で育つ美味しい米）のおむすびを提供する「むすびや」も開店した（現在、休業中）。全国から視察が相次ぎ、忙しさの中にも勢いがあつた時代である。そして、2011年の東日本大震災から、次の5年間が始まった。震災によって命を守る食



第1回鳴子の米プロジェクト会議は、2006年9月15日に開催されました。鳴子地区内外から集まった関係者。総合プロデューサー結城登美雄氏の話聞き、意見のやりとりをしました。

と農の大切さ、人同士の支えあいの意味を改めて深く考える契機となった。この時期には、作り手の米を食べ手につなぐ事業に重点を置いている。実は、1000近くの食べ手の広がり、少ない人手で対応が追いつかない状況もあつたからである。悪戦苦闘ながらも経験を重ねて、徐々に体制を築いてきた時期であつた。また、以前から行っていた地元小中学生を対象にした

食育の講演や「食の哲学塾」の開催など、農と食の大切さをていねいに伝え、共に考える取り組みも継続してきた。この10年間を振り返れば決して順風満帆ではなかった。それでも続けてこられたのは、何よりも作り手と食べ手の皆さんからの温かい励ましの声や、喜ぶ笑顔があつたからである。そしてもう一つ挙げるとすれば、プロジェクトのメンバーが「地域

の支え手」としての役割を少なからず意識してきたからだと思う。地域づくり活動を10年間継続するのはとても難しいと言われている。逆に、10年間続けられれば、その活動は地域にとって本当に必要なものだったということだ。その意味では、プロジェクトの意義はあつたと確信できる。そしてこれから次のステージに入ることになる。今一度「地域の支え手」としての原点に立ち戻って、これから何をすべきかを、地域の中に見つける必要があるかもしれない。相変わらず農業を取り巻く環境は厳しく、作り手の高齢化も進んでいる。また、鳴子地域自体も活力を失いつつあり、いろいろな問題が山積しているように見える。地域の問題解決には、もはや一つの分野、一つの組織だけでは立ち行かない。鳴子の米プロジェクトだけではなく、地域内外のさまざまな人・組織がつながり、共に鳴子のために力を尽くしていく、そのような仲間づくりができれば、これからの10年にも希望がみえるように思える。

鳴子の米プロジェクト
理事 大泉 太由子